

世界の終わりと ハードボイルド・ワンダーランド

高桑翌日

上昇する鉄の箱の中に俺が一人。リュックにはスタンガンが入っている。俺ではなくて、女友達の女友達の護身用につきさつき買ったもの。大男を気絶させるぐらい強力なやつ。

エレベーターは二人以上入るべき乗り物ではない。空間的な狭さもさることながら、精神衛生上の、落ち着きの具合がまるで違うからだ。正面のドアには、所狭しと広告が貼ってある。ロミオと竜騎士夢のコラボレーション。最高速の別れの歌。更新料ゼロのウイルスセキュリテイ。目的の五階、ヤマツチモデルショップは軍事モデラーに有名な店で、関連するポスターも多い。

五階に到着してドアが開くと陳列棚ばかりがあって微かにシンナーの匂いがする。俺は辺りを見回しながら慣れた足取りで店の奥に足を運び、塗料用溶剤を手にとって次は受け皿の予備を買おうとして、その隣の壁にある場違いな商品に気が付いた。それはコンピュータゲームのパッケージだ。「終わるせかいの終わり」とタイトルが書かれ、イラストには山際から除く夕日をバックに少年と少女が草原に並んでいる。少女は両手首を仰々しいベルトで縛られ、俯いたまま表情が見えない。隣の男も同じく俯いて両手の甲を合わせているが、拘束するものは何もなく、代わりに首から二筋血を流している。裏側を見ると、「誰が世界を殺したか?」とキヤッチコピイが書かれていた。

ゲームを棚に戻して商品をレジに運び、本屋で貰うような紙袋を手にも今度は階段で降りる。近くで工事をしているようで切削音が響いている。店の裏にある螺旋階段は歩きたびにガンガン音を立てる。

辺りはもう暗い。駅前歩いて戻って、花壇のふちに腰を下ろし、近くに大型電気店があるのをふと眺める。バナナジュースを売る店員と路地のネコ。正面のビルの垂れ幕の「現実なんてドーデモイイ」という文字。あとは手元に生えているヘビイチゴ。こんな取り止めのない組み合わせでも、この町では作品の連想によって意味を持つ。それらは全て木の枝のように繋がっているもので、決定的に現実感にかけていて、唯一の幹はこの町だ。いくら多くのものにリンクしていても、それらは記号でしかなくて、むなし。

乱暴にリュックを投げ出してしまったことに気づいて、中身が壊れていないかを確認する。ちゃんとスタンガンが黒い箱に入っている。